



石田凱士&KAZMA SAKAMOTOが語るB.G.I.とGLEATの現状

“DRAGONGATEの二番煎じ” という先入観からの脱却

2026年一発目の東京大会1・20新宿FACEにおける石田凱士&KAZMA SAKAMOTO vs T-Hawk&田村ハヤトのG-INFINITY選手権試合は、久々にGLEATの枠を超えてプロレス界に届いた内容だった。JDリーの新加入によりメンバーも増え、BLACK GENERATION INTERNATIONALは団体の中心を疾走している。そんな中、タッグ王者組の石田とKAZMAはどのような立ち位置から団体とユニットを見据えているのかを聞いてみた。

(聞き手・鈴木健.txt)

KAZMAさんという大人がいなかったら 自由なB.G.I.は…

——1・20新宿FACEにおけるG-INFINITY防衛戦の試合内容が、現場の観客やYouTube生配信視聴者の間で好評です。

石田 試合の感覚的に言うと、やられた記憶しかないんですけどね。ただ、試合後にも言いましたけどT-Hawkとの試合がやっぱりやっていて楽しいんですよ。3年前のシングル(2023年4月12日、後楽園ホールにおけるG-REX選手権)もそうでしたけど、やっていて楽しいのは本当にT-Hawkぐらい。

——好きか嫌いかと言ったら、今でも…。

石田 大っ嫌いですね。人としては尊敬できますけど、プロレス観がいかにも真逆やし。

——闘うと波長が合っているように見えますが。

石田 そこがプロレスの面白いところというか、同じプロレス観同士の方がいい試合になると思われがちですけど、嫌い合っている者同士で試合をやると意外とハマったりするんですよね。それを言うたら僕、中嶋勝彦のことも大嫌いなのに、シングル

マッチの評判がよかった。あくまで僕のファイトスタイルの場合ですけど、嫌いな者同士の方が合うのかもわからないです。

——T-Hawk&田村ハヤト組を退けたことに関しては？

KAZMA 先ほどの評判のことになるんですけど、思ったより反応があったなという感触はありました。あとは石田と同じく、やっていて面白かった。ただ、この試合のラインはT-Hawkと石田によるものだったので自分の性格上、そういう時は邪魔する必要がないってちゃんとアシストができればいいというスタンスで。ああいう勝ち方（石田が攻め込まれながら切り返してT-Hawkに逆転勝利）ではあったけど、見る方も面白かったんじゃないですか。

石田 僕はもう“勝手レスラー”なんで、どっちかというシングル向きなんです。自分のやりたいことをやるし、タッグになってもその気持ちは変わらないんで、僕のようなやつと組んじゃうとグチャグチャになるんだと思います。でも、KAZMAさんはそういう場面で一歩引いてくれる。もちろんキャリアもあるし、そういう部分があるからこそ、このタッグが今一番しっくりきているんです。5年ぐらい前も一緒に組んでタッグチャンピオンやっていましたけど（DRAGONGATEのオープン・ザ・ツインゲート選手権）、その頃からやっぱり一歩引いて見てくれていました。プロレス観も合っているんで、タッグチームとして一番歯車が合っていると思いますね。僕からしたら、本当に「ありがとうございます！」です。

——プレイヤーとして主役になりたいという欲を抑えて、アシストに回れるのはユニットやチームとしての強みだと思います。

KAZMA 僕はもう、タッグの方が好きなんで。ハッキリ言ってシングルは嫌いです。

石田 嫌いって言っちゃうんだ！

KAZMA タッグマッチって、プロレスにしかない特殊な形で、6人タッグもそうですけど自分が見てきたのは東京愚連隊だったり、邪道・外道だったりなので。そういうチームはちゃんと役割分担できていて、だからといってすべてにおいて自分が下がるというわけでもないというのが完成されていた。そういうのが常に意識の中にあると、やっぱりプロレスはタッグが一番面白いよなって思うんです。

——石田選手は基本、シングルプレイヤーだと言われましたが、こうしてタッグの方でも実績を上げているということは、そちらにも気持ちを注げているということですよ。

石田 そうですね。それはKAZMAさんとだからこそ気持ちを向けられているんだと思います。

——たとえば、パートナーが渡辺壮馬選手だったら…。

石田 どうなんでしょう、意外とハマるのか。今はKAZMAさんとチャンピオンやっ





ているからというのもあって、壮馬とはそれほど組んでいないんでやってみないとわからないですけど…まあ、たぶん合わないでしょうね。

——大門寺崇選手は？

石田 一番合わないと思います。B.G.I.の中に合う人間…KAZMAさん以外はいないかもしれない。

——同じユニットの中にタッグチームとして合わない人ばかりというのも。

KAZMA それほど自由がすぎるんですよ、みんな。

石田 本当にそれが一番。全員が勝手にやっているユニットだからこそ、KAZMAさんのようにどっしりしている、子どもたちを見る大人のような人がいるっていうのが大きい。

——ユニットにおいて、大人って絶対に必要ですよ。

石田 そうなんです。大人がいなかったら今頃B.G.I.はグチャグチャになっていますよ。

——1・20新宿FACEでG-INFINITY王座を防衛したあと、石田選手が今後の所信表明的なマイクをやっている最中、ずっと壮馬選手と大門寺選手がくっちゃべってはじゃれ合っていたのですが、あれはリーダーとして許容しているんですか。

石田 それ、知らなかった。僕は別にいいんですけど、KAZMAさんが裏で怒っている可能性はあります。まあ、それも含めてB.G.I.のいい絵なんじゃないですか、自由だということを伝えるには。

——自由度がありすぎた結果、2・11後樂園ホールはユニット同士のタイトルマッチになりました。

石田 これは旗揚げ当初から言われていることだと思うんですけど、GLEATって所属選手ほど落ち着いているというか、若い選手が前に出ない。その中で、JDリーもARASHIも二十代前半の若さで俺らと同じくGLEATの中心にいきたいという気持ちを持っている。でも、あのキャリアでその気持ちをリング上で出せるかどうかって言ったらなかなか出せないと思うんですよ。ましてや同じユニットだったら、どうしても若い方が遠慮してしまっていて言い出せない。だけどあの場で口に出したことで、同じ目線にいるんだなってわかったから受けました。あの2人とだったら、ユニット同士としてほかとは違うものが見せられるという確信も持てたんで。だから後樂園は、GLEATの中心にいきたい、GLEATを盛り上げてやるっていう気持ちがB.G.I.にこそあるんだということが、お客さんもわかる試合になるでしょうね。

B.G.I.のインターナショナル感をGLEATらしさそのものにしたい

——KAZMA選手はそのキャリアの中で、さまざまなユニットを経験してきました。それらと現在のB.G.I.を比べてどうでしょう。

KAZMA これはさんざんGLEAT自体として言われてきたことですけど…寄せ集めね。B.G.I.もある意味、寄せ集めですよ。みんな出自が違いすぎる。所属もいればフリーもいて、なんなら国籍もバラバラ。そういうユニットは今までなかったけれど、それこそがGLEATらしさなんです。僕はすごく面白いと思うし、寄せ集めであることをマイナスにとらえるのではなく、それを強みにしてやればもっとGLEAT自体もうまくいくと思っているんです。B.G.I.が自由で出どころの違う者たちの集団であることがGLEATそのものだから、それがうまくかみ合っているものになればGLEAT=BLACK GENERATION INTERNATIONALってなるじゃないですか。

——B.G.I.らしさがそのままGLEATらしさになると。

KAZMA だからGLEATにとって、B.G.I.は団体のよさが認知されるための武器ですよ。

——ユニット名にインターナショナルとつけたのは、はじめから国際的な広がりを視野に入れていたのですか。

石田 スタートからそもそもインターナショナルだったんです。メキシコ人がいて、アメリカ人がいて、オーストラリア人がいて。でも、2年後にはそいつらが海外のほかのところにいっちゃって日本人のメンバーだけになってしまった。だから今は、B.G.I.のフェーズⅡです。ブラック・アンドロメダはずっとメンバーでいてくれて、JDも入ってやっとインターナショナル感が戻ってきた。だから、ここからが俺たちの第2段階。インターナショナル感っていうのも今、KAZMAさんが話したようにこれもGLEATらしさにしたかったんです。フリーだろうが国籍が違かろうが俺らがGLEATやぞ!っていうのを方向性として打ち出したかったからこそインターナショナル。

——現在のGLEATにおけるユニットでもっともメンバーが多くなりました。これは自分たちでアンテナを張って見つけてくるのか、自分も加入したいと名乗りをあげてくるのかどちらが多いんですか。

石田 基本的には僕らが目をつけていますね。JDに関しては、ハイフライヤー系のメンバーがほしいと思っていたんで、新宿に来てくれました。

——ARASHI選手に関しては、まだ広く業界に知られていない存在でありながらよく目をつけたと思います。

石田 ビジュアルがいいし、今は(みちのくプロレスの)東北タッグのベルトを持って

いて勢いがありますから。あとはこっちのメリットだけでなくGLEATに上がることでARASHIの幅も広がると思うんですね。

KAZMA 僕はそういうアンテナに関しては常に張っています。B.G.I.ではないけど今、GLEATに上がっているヴァンペール・ジャックなんてメチャクチャいい選手だし、それがGLEATでハネればもっと可能性が広がる。別にGLEATだけしか出ないっていうことでもないから、彼がほかでより注目を浴びればGLEATにも波及する。だから同じユニットではなくともそういう活躍をしてほしいと思うし、ARASHもJDもすごい選手なんで、今のポジションでいい選手で止まるのか、もっとすごい選手になるかは本人次第。でも僕はもっとよくなると思っている。

——B.G.I.に限らず、GLEATはほかのところでまだ埋もれている選手たちがステージを上げるための場になっていると映っています。ユニットとしてもそれを実践して、そういう選手に輝けるステージを与えたいという思いはあるのですか。

KAZMA それはCIMAがまさにそういう考えでしたよね。青田買いじゃないけど、いろんなところにアンテナを張って、リコシェであったりPACであったり海外からも発掘していた。彼らがその後、世界に出ていったことで「DRAGONGATEで活躍していた」と言われて団体が注目される。だからGLEATもそういう団体になれたらと思う一方、なったらなったで出ていってほしくない。

石田 そうやな。

KAZMA やはりステータスが上がってもGLEATと一緒にデカくなってもらいたい。でも、そこが一番難しいところですよ。まあ、今はSNSとかで世界中のプロレスが見られちゃうんで、なかなかほかが目をつけていない逸材っていうのは見つけづらくなりましたけど、そういう中でも青田買いされる前にGLEATに来てもらったり、それこそB.G.I.に加入したりして、GLEATの注目度を上げられようアンテナを張り続けます。

——ということは、今後も国内外問わずB.G.I.に入りたいという選手がそれ相応のものを持っていればメンバーが増えていくと。

石田 基本、ウチは入るのも出るのも自由。勝手にどっかにいっちゃうんで。鼓太郎と井土に関しても「出ます」と言うから「そうですか」って答えたただけでしたしね。人はね、自由が一番なんすよ。縛りつけてもよくないし。入りたいと言って、あり得ないぐらいショツパかったら別ですけど、これは一緒にやったら楽しそうやなと思ったらOKです。楽しいが一番ですから。

——一つ確認させていただきたいのですが、BLACK GENERATION INTERNATIONALは反体制ユニットなんでしょうか。GLEAT本隊ではないということで、そのように受け取られていますか。

石田 反体制というか…何なんだろう。

KAZMA いや、反体制は反GLEじゃないですか。

石田 そこですね。俺らはGLEATを盛り上げたいという意識でやっているけど、反GLEの連中はおそらくGLEATが嫌い、GLEATを潰したいという、そういうイメージですね。俺らはGLEATの反乱軍ではない。GLEATのためにやっています。ただし、そのための手段は選ばないよというだけで。きれいなやり方だけではないけど、俺らが一番このリングを沸かせるからっていうね。反乱ではなく、自由。

——では、GLEATそのものを叩き潰すためというわけではないんですね。

石田 全然。だから、向こう（本隊）は腹立っていると思いますよ。本来なら自分たちがやるべきことを勝手に名乗られて。それで「勝手なことやってんじゃねえ！」って来たら俺らは叩き潰しますけど。

「B.G.I.はなんちゃって黒」という シャーマンの発言に対しては…

——実は先に河上“シャーマン”隆一選手にインタビューしたんですけど、そこでは「反GLE MONSTERSは労働組合。自分がチャンピオンになることで権限を握り、選手の賃上げをする」と言っていたんです。

KAZMA 労働組合って、あいつは社員じゃないだろ。

——フリーの立場でありながら、そういうところに着手していくそうです。

石田 そういうことを言うわりにはリング上でやっていることがムチャクチャやないですか。ほかのユニットを潰すようなことをやっていて、どの口で選手のためになんて言えるんですか。

KAZMA 「それってあなたの感想ですよ」っていうやつですよ。所属でもないフリーが俺らの気持ちなんてわかるはずがないのに何を代表ヅラしているのか。賃上げとか言っているけど、仮に俺らが満足していたら、あいつのやろうとしているのは意味のないことになりますよね。所属の人間がいくらもらっているだとか、知りもしないでテキトーなことを言っているだけです。筋が通っていいと通っていないから、健さんも鵜呑みにしない方がいいですよ。

——いや、聞いている時はけっこう感心してしまって…。それで、シャーマン様にB.G.I.は反体制かと聞いたら「あれは黒ではなくグレーだ」と言っておりまして。要はなんちゃって黒だと。

石田 あー、それはブラックの意味を完全に履き違えていますわ。“反”や“悪”がブラックだと思っているんだろうけど、別に俺らは悪いからブラックとつけたわけやな



いで。

KAZMA 黒=悪という固定観念にとらわれてしまっていますよ、それ。

——それほどnWoのイメージが凄いとも言えますが。

石田 シャーマンに言いたいのは、別に俺らはWHITE GENERATIONでもいいわけですよ。じゃあ、なぜ黒なのかというと、初期メンバーのフラミータがメキシコでやっていたチームの名前がBLACK GENERATIONだったんです。それで彼が日本に合流したいという話があったんで、それなら俺もユニットを作るからその名前を貸してよって言って、メンバーが多国籍だからINTERNATIONALをつけようとなった。だから、ブラックであることに対する意味や思い入れのようなものはないんです。俺らは悪さをするからブラックや！なんていうのは、これっぽっちもないですわ。

KAZMA 黒というだけで極悪集団と思うのはよくないですよ。

石田 そんな反GLEのような安易なネーミングじゃないんですよ、俺らは。あいつらとは違いすぎる。

——ただ、GLEATの外から眺めている層の中にはB.G.I.も反GLEも反体制なのに、なぜ結託しないのかという見方をしている人もいるでしょう。

石田 そういう人はちゃんと試合を見て、内容も見て、マイクもちゃんと聞けばB.G.I.と反GLEが全然違うものだ絶対わかります。

KAZMA 政策が違いますよ。

——同じ野党でも政策が違うような。

KAZMA それと一緒にです。

——そうなると、2・11後樂園でシャーマン様の手にG-REX王座が渡ったとしたら、獲りにいかなければならないですよな。

石田 ベルトを獲って、さっき聞いたようなことをやるっていうんであればそれは好きにしてくださいですけど、今はタッグチームとして完成度を上げることでGLEATの

タッグ戦線を盛り上げたいんで、後樂園まではタッグに集中しています。でも、さっきも言ったように僕は基本、シングルプレイヤーですから。

KAZMA タッグに関してもシングルにしても、所属の中から自分がいくという人間が出てこないですよな。名乗りをあげるのはシャーマンのような野党の人間か、B.G.I.の人間かであって。それは本当に、もっと考えた方がいいと思う。結局、元WRESTLE-1勢よりも元DRAGONGATE勢の方がガツガツしているって言われるのは、そこなんです。それによって、GLEATはDRAGONGATEの二番煎じだっていまだに言われている。実際は先入観でしかなくて、もう今ってそうでもない形になっているにも関わらず、まだそういうイメージで見られている。やっぱり一度ついた印象ってなかなか拭えないものじゃないですか。それは今まで僕が嫌というほど経験してきたことなんで。GLEATも今年で5年目を迎えるというのに、生え抜きの自分たちがそれでいいの？って思いますよね。

——その元WRESTLE-1の人間が身内に1人いるのですが。

石田 僕はノータッチ。

KAZMA いや、牡馬こそ変わったじゃないですか。抑えつけられてきたのが自由になって解放された。どれだけ自由かということ、俺らの言うことを全然聞かないですからね。まあ、それでも自由にやることでいい方向に転がっていきならそれでいい。まだまだ変わると思いますよ。

石田 俺はノータッチ。まだ見習いですから。

——見習いなんですか？ 1・10大阪のG-REXタイトルマッチはよかったじゃないですか。

石田 ああ、あれはよかったですよ！ 僕も感情が入って応援しちゃいました、ノータッチのわりに。まあ、GLEATに関してはKAZMAさんが言う通り、業界的には元DRAGONGATEの集まりって見られますけど、GLEATを見続けている人はすでにそんなことを思っていないはずですよ。傍からチラ見している人間がSNSですべてを見ているかのような口で言っているだけで。そんなもん、目にしても意味ないやないですか。そんなことはどうでもいいから、あと先のことを考えるよりもまず動けと。JDとARASHIみたいに行動で示せてGLEATの若い連中には言いたいんです。それぐらいの勢いがほしいツスよね。それをやった結果が今の牡馬なんで。それが正解なのか不正解なのかは、その時点ではわからなくてもいいんです。大切なのは自分を変えようとする姿勢なんですから。そういう行動力がほしいですよな。だから次のタイトルマッチ、もちろん僕らが勝つつもりでいますけど、その後どうなるのか。若い人間が動くかどうかを見てみたいですよね。JDとARASHIとのタイトルマッチは、そのきっかけになる気がします。

